

日本学術会議フューチャー・アースの推進と連携に関する委員会
持続可能な発展のための教育と人材育成の推進分科会
ESD/SDGs カリキュラム小委員会（第 25 期第 7 回）議事要旨

日 時：2022 年 4 月 20 日（水） 17：00～18：00 オンライン会議

出席者：小金澤孝昭（議長）、鈴木克徳、氷見山幸夫、市瀬智紀、及川幸彦、
新井雅晶、石原靖久、小玉敏也、小林亮、島田智、棚橋乾、安田昌則
オブザーバー：横田美保、高倉洋美

1. 6 月 5 日の学術フォーラムでの報告の内容についての検討

2022 年 6 月 5 日（日）に開催される日本学術会議主催 学術フォーラム「持続可能な社会を創り担うための教育と学習のチャレンジ」での ESD/SDGs カリキュラム小委員会からの登壇者の発表内容について概要の紹介と検討が行われた。以下に、登壇者の報告要旨を記載する。

「SDGs の達成に資する ESD for 2030」

及川幸彦（奈良教育大学）

2015 年の国連サミットにおいて、持続可能な社会の実現に向けた世界共通の目標として、「持続可能な開発目標(SDGs)」が掲げられた。これは 2030 年までに世界全体が達成すべきグローバル目標として、17 の目標と 169 のターゲットから構成されている。この SDGs において、「教育」は目標 4 に位置付けられ、「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を保証し、生涯学習の機会を促進する」とされている。しかし、教育は、単に目標 4 にとどまるものではなく、人材育成を通じて SDGs の 17 の目標すべての達成に貢献するものである。

この国際的なコンセンサスの下、ユネスコでは、グローバル・アクション・プログラム (GAP) に続く新たなフェーズとして、2020 年から「ESD for 2030 : SDGs の達成に資する ESD」を開始した。そして、その翌年の 2021 年には、キックオフとなる「ESD に関するユネスコ世界会議」をドイツのベルリンで開催し、ESD for 2030 の指針となる「ESD に関するベルリン宣言」を採択した。

一方、我が国においても ESD の提唱国として ESD for 2030 をオールジャパンで推進し、世界の ESD をリードすべく、ESD 円卓会議及び日本ユネスコ国内委員会等の議論を経て、2021 年に ESD 関係省庁連絡会議で「我が国における『持続可能な開発のための教育 (ESD) 』に関する実施計画」を策定した。

このような国内外の動向を踏まえ、ESD が国際的に整理された SDGs にどう貢献するかという観点から新たな価値付けを行うとともに、課題を明確にし、今後の方向性を検討する。

「ESD をめぐるこれまでの進展と今後の展望」

鈴木克徳・横田美保（NPO 法人 ESD-J）

これまでのESDをめぐる国際的な枠組みの進展を踏まえ、ユネスコスクールの活用やユネスコスクールを支援するための大学間ネットワーク、地域でESDを推進するための地域ESD拠点(RCE)やESD推進ネットワークの設立等、「国連ESDの10年」、グローバル・アクション・プログラム(GAP)時代における日本のESDの世界的にユニークな特徴を説明するとともに、新たに策定された枠組みであるESD for 2030及びそれを踏まえた日本の第2期ESD国内実施計画の推進に向けた課題を明らかにする。[鈴木]

国内NPOとユース世代(高校生・大学生)が交流、連携することにより、学び合うことができ、それによってお互いの活動を深めることができるという事例を紹介する。具体的には、ウガンダにおける国際支援活動「生理で学校に行けなくなる女子学生の教育環境改善事業」を実施している国内NGOに、そのテーマに関心を持った高校生が探求学習の授業の一環でコンタクトしたことで、高校生とNPO間の交流が生まれ、意見交換の中で、互いの活動を深めるヒントが得られ、それが活動に還元されている事例、並びに課題や展望について説明する。[横田]

「ESDカリキュラムと評価～大曲南中学校の実践～」

島田智(大仙市立大曲南中学校)

ESDには、教育としての目的(身に付けさせたい資質・能力)と、持続可能な開発としての目的(知識・意欲・行動変容等)があり、両面からのアプローチが必要である。目的を達成するための手段としては、カリキュラム・マネジメントを機能させることが不可欠となる。ホールスクールアプローチでのカリキュラム・マネジメントを実施するにあたり、本校では教科等のつながりが分かるESDカレンダーを作成した。現在のESDカレンダーには、身に付けさせたい資質・能力を明確化し内容のつながりと共に掲載した。

カリキュラムの一例として、「食」のプログラムを紹介する。学校給食センターから食品残渣由来の堆肥を譲り受け、野菜栽培を行った。栽培中に、微生物の働きについての講座を実施し知識を深めた。野菜を収穫した後は、省エネクッキングで調理して食べ、地産地消を味わった。さらにそこから食品ロスに興味をもった生徒が、スーパーの食品ロスの状況や対策を調べたり、フードバンクを訪問したりして学びを広げ深めた。このプログラムでは、多くの外部リソースとの連携を行い、社会に開かれた教育課程の実現にもつながった。

ESDの評価は、2つの切り口で行った。教育としての評価は、アンケートを行い、6つの身に付けさせたい資質・能力を23の設問により評価した。持続可能な開発としての評価は、毎時間の振り返りの文章等から評価した。確かな意識変容、行動変容が見られた。

「地域全体で進める持続可能な社会の創り手の学び～大牟田市の実践～」

安田昌則(前大牟田市教育委員会)・高倉洋美(大牟田市立宮原中学校)

本市の全公立小・中・特別支援学校が10年前に一斉にユネスコスクールに加盟承認された。以来、「ユネスコスクール・ESDのまち おおむた」を掲げ、市を挙げてESD/SDGs

を推進している。フォーラムでは、大きく3点、市を挙げた推進体制や具体的活動、学校の代表実践事例、成果と今後の展望について報告する。1点目の教育委員会や市長部局では、施策、推進体制等を工夫し市役所全体で取り組んでいること。また、各学校への支援として教職員の研修会・全国実践交流会・子供の発表会の開催やESD/SDGsを推進するために、ユネスコスクールの日制定・ユネスコスクール・ESDのまち宣言・ESDコンソーシアムの構築等特色ある取組等について報告する。2点目の学校の代表事例では、各学校の地域課題や地域の良さを踏まえた小学校・中学校5つの特色ある実践事例を紹介したい。3点目の成果と今後の展望では、市を挙げて取り組んできたユネスコスクール・ESD/SDGsの10年間の特徴をまとめ、学校・子供・地域等のそれぞれの成果について報告したい。特に、持続可能な社会の創り手である子供たちの変容について、市全体と小・中学校で学んだ子供が現在ユースとして活躍している姿を報告する予定である。

「学校と地域社会の連携～飯田市の実践」

小玉敏也（麻布大学）

全国各地で、人口減少に伴う学校の統廃合が進行している。今後のESD実践では、その現状を踏まえた「地域の持続可能性」を課題化した「地域との連携・協働」論が求められている。

長野県飯田市の遠山郷（上村地区・南信濃地区）で進められたESD実践は、その典型事例である。2018年から開始された本実践は、多様なセクターによる連携体制の下で、同地域にある小学校2校と中学校1校をESDのコンセプトで魅力化を図り、人口減少に悩む地域を活性化させるために取り組まれた。本実践では、学校が豊富な地域資源（霜月祭り、エコ・ジオパーク、特産物等）を活用して質の高い学習活動が展開できるようになっただけでなく、中学生がまちづくりに参画できるほどに成長した。その過程で、公民館活動を通じて自主的な住民団体や委員会が結成され、学校の支援に留まらず、住民自身が地域の課題を解決していく活動や、若者を中心としたビジネスや学習活動も新しく開始されるようになった。つまり、学校ESD実践が地域まるごとのESD実践に発展していったのである。

本プロジェクトが成果を上げた要因には、当該地域固有の地理的・歴史的な特殊性があるが、同様の課題に悩む中山間地・島嶼部の地域が参照できる汎用性もあるものと思われる。本実践から、どのような知見が導き出せるか検討したい。

2. 6月5日の学術フォーラムのポスターについて

氷見山委員より「学術フォーラム」のポスターの紹介がなされた。修正を経て、ポスター最終版が広報資料として各方面に配布・掲示された（添付ファイル）。

3. 6月5日の学術フォーラムに関する事務局からの確認事項

学術フォーラムへの委員の参加に関連して、日本学術会議事務局より、以下の確認事項の連絡が行われた。

○旅費

学術会議の講堂での参加であれば、旅費の対象となる。（要手続・個別対応）

○YouTube 配信

ZOOM ウェビナーでの講演映像を、休憩部分等をカットし編集の上、YouTube 映像として配信する。URL は日本学術会議ホームページに掲載して、広く閲覧に資する。

○QR コード

「学術フォーラム」ポスターの申込フォーム QR コードは日本学術会議にて作成可能。

○後援名義

名義使用のための依頼文書が必要であれば、日本学術会議事務局より依頼文書を発出可能である。